

アジア・太平洋研究センター主催講演会

日 時：2023年9月29日（金）

場 所：南山大学 Q棟5階51, 52会議室

テーマ：現代インドネシアのイスラーム復興

報告者：荒木 亮（宗教情報センター専任研究員）



◆ジャワのムスリム村落における憑依儀礼の盛り上がり

わたしがフィールドワークを実施してきた西ジャワ地域の都市近郊に位置するムスリムの村落では、近年、青年団の若者を中心にクダ・ルンピン（kuda lumping）と呼ばれる憑依儀礼が盛り上がりを見せている。クダ・ルンピンとは、竹で編まれた馬（クダ [kuda]）のレプリカに人が跨り騎馬戦を表現する踊りである。一説には、植民地期に侵攻してきたオランダ軍に対してジャワの王宮とその戦士たちが自己の力を見せるべく奮闘した姿が、この踊りの原型とされる。今日でも、ジャワ島を中心に東南アジア島嶼部で散見される伝統的な儀礼として知られており、その踊りないしは儀礼の最中には、踊り子に霊が憑依するという現象がみられる。

◆憑依儀礼とイスラームという相反

調査村では毎年8月17日頃、独立記念日を祝う祭り行事の一環としてクダ・ルンピンが行われる。儀礼の最中、ごく普通の村人が踊っているうちに霊に憑かれて意識を失って倒れたり、尋常ではない顔つきで暴れまわったりする。また憑依された状態の者に対して、パワン（pawang）と呼ばれる霊的な能力も備えた土着の知識人によ

る除霊も行われる。

ただし、ムスリムである村人が憑依儀礼（クダ・ルンピン）を行うこと自体が宗教（イスラーム）という点で問題を孕んでいる。というのも、少なくともインドネシアにおける一般的なイスラームの理解からすると、憑依儀礼のように意図的に霊に憑かれること、換言すれば憑依を誘発することはイスラームの神とは異なる超越的な存在との関係を取り結ぶことにつながると認識されるからだ。そして実際にこの村でも、こうした実践を多神教的なものに見做し、厳格な一神教であるイスラームの教義にはそぐわないと考える者が少数ではあるが存在する。

◆インドネシアのイスラーム復興と都市部の近代化

本講演では、上述したように調査村における憑依儀礼（クダ・ルンピン）を概観したうえで、こうした慣習を否定的に捉える村人の多くが、実は大卒者といった村のエリートや都市からの移住者であることを報告した。そのうえで、この背景には、次のようなインドネシアにおけるイスラーム復興の展開の仕方が関係することを説明した。すなわち、中東地域に始まる世界的なイスラーム復興がインドネシアでも顕在化してきたのは、大凡1980年頃と言われている。ただし、スハルト政権によるイスラーム政策の結果、インドネシアでは公務員や都市の中間層を主たる担い手として「正しく」イスラームを理解し実践することが同国の経済発展と近代化を享受・体現し得る、さらにはその担い手達が社会的に信頼するに足る者のロール・モデルだとする価値観が形成されてきた。そして、憑依儀礼に対する賛否の立場は、大まかには、〔賛成派としての〕村落社会に生きる村人（orang kampung）と〔否定派としての〕高等教育を受けたエリートや都市民（orang kota）という区分と重なり合う部分があると言える。

◆都市化への抵抗、あるいは都市民との差異化の創出

イスラーム復興を象徴する『『正しい』イスラーム』に対する信奉は、ちょうど都市化が「中心から周辺」へと波及していくように、インドネシアでは都市部から村落社会へと徐々に拡大している側面がある。けれども、わたしの調査村を含むインドネシアの多くの村落社会には、高級でお洒落なイスラーム服を身に纏い、メッカへの巡礼を行うといった経済的な余裕のある者が都市部のように多く存在するわけではない。そこで本講演では、実際の語りを紹介しながら村人たちが憑依儀礼という非イスラーム的な儀礼を、敢えて伝統文化という文脈のもとに行うことの意義や理由を検討した。その結果、村人たちはイスラームへの帰依と同時に（非イスラーム的な要素を

含む）伝統文化を執り行い、それによって村（人）の都市化に歯止めをかけたり、都市民と自己とを区別するための文化的なアイデンティティ・ポリティクスを行っているという状況が浮かび上がってきた。

◆まとめ：伝統文化の再興運動からみるイスラーム復興

以上のことを踏まえ、本講演では、インドネシア社会におけるイスラーム（復興）と土着の慣習との関係性について次のように整理する視点を提示した。すなわち、イスラーム復興による「さらなるイスラーム化」は市民やエリートを牽引者として進行している現象と捉えられる。ただし、それ故に同時に差異の創造が希求されているということ、あるいは必ずしも都市的なるものに均一化しないためのアイデンティティ・ポリティクスとして、村落社会では、イスラーム復興の浸透と同時並行的に、ともすればそれとは相反する伝統文化の再興運動が展開している、という副次性をも含む現象である点も考慮されなければならない。

（文責：荒木 亮，稲垣 和也）